

京隈侍屋敷遺跡

久留米市文化財調査報告書第220集

2006. 1

久留米市教育委員会

京隈侍屋敷遺跡

久留米市文化財調査報告書第220集

2006. 1

久留米市教育委員会

序

現在の久留米市発展の礎を築いた有馬氏が筑後国へ入国したのは、1621年のことで、以来、久留米城を中心として城下町を整備し、発展して参りました。

城下町を発掘することは、久留米の発展史を紐解くものであり、先人たちの足跡を後世に伝え、歴史的風土を残して行く上で欠くことが出来ないものです。

本書は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査で、この辺り一帯に広がる侍屋敷の一角を発掘した報告です。江戸時代後期から幕末の貴重な資料を得ることが出来ました。十分な調査記録とは言えませんが、文化財愛護思想のより深い理解と普及に寄与し、学校教育、生涯学習の教材として、また、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご理解のもと、ご協力を賜りました株式会社野中建設代表取締役野中様をはじめ関係各位に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成18年1月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、平成17年度に株式会社野中建設の委託を請けて発掘調査を実施した、久留米市城南町に所在する共同住宅建設に伴う京隈侍屋敷遺跡第5次発掘調査の報告である。
2. この調査の略称はLKG-005, 調査番号は200508である。
3. 平成17年4月1日付の機構改革により、久留米市教育委員会教育文化部文化財保護課は久留米市文化観光部に再編された。これに伴い、文化財行政に係る事務は久留米市教育委員会の委任により久留米市文化観光部文化財保護課が執行する。
4. 本書に掲載した遺構の実測は、主に江島が行い、森啓恵、塚本明美の協力を得た。また、遺物実測、拓本及び清書は、中野美代子、永瀬美保子、江島が行った。
5. 遺構写真の撮影及び、遺物写真の撮影は園井正隆の指導の下、江島が行った。
6. 本書に使用した方位は全て座標北である。また、基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標による。
7. 本書に使用した遺構表記は下記の記号による。
SE:井戸 UK:埋甕遺構 SD:溝状遺構 SI:竪穴住居 SK:土壙
SP:ピット SX:不明遺構
8. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
 - ・ 法量の数値はcmである。また、() 内の数値は口径及び底径については推定値、器高においては、現存値を示す。
 - ・ その他の部位を計測した場合は、数値の前に長さ、厚さと記した。() 内の場合は、現存値である。
9. 調査に関わる遺物、記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用される予定である。
10. 本書の執筆、編集は江島が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	
第2節 調査体制	
第3節 調査の経過	
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の記録	3
第1節 基本層序	
第2節 弥生、古墳時代の遺構	
第3節 近世の遺構	
第4章 まとめ	9

図版目次

図版1-1 北側調査区全景（南より）	図版4-24 S K120検出状況（西より）
図版1-2 南側調査区全景（北東より）	図版4-25 S K120土層断面
図版2-3 U K3検出状況（東より）	図版4-26 S K140検出状況（南より）
図版2-4 U K23検出状況（南より）	図版5-27 S K1出土磁器碗
図版2-5 U K23完掘状況	図版5-28 S K1出土蓋
図版2-6 U K45検出状況（南より）	図版5-29 S K1出土盃
図版2-7 U K97検出状況（南より）	図版5-30 S K1出土皿
図版2-8 S E17検出状況（南西より）	図版5-31 S K1出土段重・鉢
図版2-9 S E17断ち割り状況（南より）	図版5-32 S K1出土遺物
図版2-10 S E49断ち割り状況（東より）	図版5-33 S K1出土輸入磁器
図版3-11 S K1検出状況（南より）	図版5-34 朝妻焼
図版3-12 S K1土層断面	図版6-35 S K1出土植木鉢
図版3-13 S K14検出状況（東より）	図版6-36 S K出土陶器碗
図版3-14 S K14西壁検出状況	図版6-37 S K1出土陶器
図版3-15 S K14土層断面	図版6-38 S K1出土灯明皿
図版3-16 S K47検出状況（西より）	図版6-39 S K5・14出土遺物
図版3-17 S K43検出状況（西より）	図版6-40 S K14出土皿
図版3-18 S K43土層断面	図版6-41 S P6出土鉢
図版4-19 S K53検出状況	図版6-42 S P6出土鉢底面（墨書）
図版4-20 S P89検出状況（南より）	図版7-43 S K43出土遺物
図版4-21 S K98検出状況（南西より）	図版7-44 S K43出土植木鉢
図版4-22 S K98西壁工具痕検出状況	図版7-45 S K43出土鉢
図版4-23 S K120検出状況（北東より）	図版7-46 S K44出土鉢

図版 7-47	S K 47出土火鉢	図版 9-61	鉢
図版 7-48	S K 47出土碗	図版 9-62	その他の遺物
図版 7-49	S K 47出土中皿	図版 9-63	ハマ・トチン
図版 7-50	S K 120出土遺物	図版 9-64	土製品
図版 8-51	輸入磁器（清朝）	図版 9-65	U K 32出土甕
図版 8-52	S K 120出土播鉢	図版 9-66	U K 97出土甕
図版 8-53	S K 138・141出土遺物	図版10-67	弥生・須恵器・土師器
図版 8-54	S K 138・141・151出土遺物	図版10-68	銅銭・煙管
図版 8-55	S K 141・151・153出土遺物	図版10-69	S K 141出土板状土製品
図版 8-56	S K 153出土火鉢	図版10-70	U K 23出土甕
図版 8-57	仏具	図版10-71	S K 120出土甕
図版 8-58	瓶		
図版 9-59	徳利		
図版 9-60	急須		

挿図目次

第1図	遺跡周辺図（1／20,000）	2
第2図	遺構配置図（1／200）	3
第3図	遺構実測図①（U K 3～97・S P 89 1／20、他は1／40）	6
第4図	遺構実測図②（S K 43 1／80、他は1／100）	7
第5図	遺物実測図（1／4、93・127・129 1／8）	8
第6図	安政二年久留米城下図	9
第7図	出土銭貨拓影（1／1）	図版10

表目次

第1表	遺物観察表①	10
第2表	遺物観察表②	11
第3表	遺物観察表③	12

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

平成16年6月16日（16文財第1－79号）、株式会社野中建設より「埋蔵文化財包蔵地の有無について（照会）」が提出された。対象地は久留米城下町にあたり、試掘が必要であるが、現時点では建物が建っているため、解体後に試掘を行う回答を行っている。

平成17年度に至り、解体終了の報を受け、4月28日に試掘を行った。その結果、30～60cm掘り下げたところで遺構面に達した。共同住宅を建設することから基礎構造が深く、遺跡を保存することは不可能であり、記録保存のため、発掘調査が必要である旨を回答し、協議を行った。

その結果、発掘調査を行う運びとなり、株式会社野中建設より「埋蔵文化財発掘調査の依頼について」（回答：17文財第145号）が提出され、久留米市文化財保護課は受諾した。それを受け、株式会社野中建設と久留米市の間に埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、6月8日より調査を開始することとなった。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

久留米市文化観光部 文化財保護課

部 長	緒方眞一	事務主査	大石 昇（事前審査担当）
課 長	関 知彦	事務主査	近澤康治（事前審査担当）
課長補佐	立石雅文	庶務担当	権藤節子
事務主査	松村一良	調査担当	江島伸彦

発掘調査作業員

勝田美代子、河野好子、塚本明美、津留崎利子、中村多津子、野口カヲル、原口貞子、原口輝子、森 啓恵、安本カズ子、大塚ヒロ子、上野ヒデ子、城 幸子、塚本恵子、井上登志男、原田幹男、溝上邦雄、宮崎利文、堀田秀実

また、調査中において久留米市文化財保護課諸氏には、数々のご指導、ご助言を賜った。文末ながら謝辞を表します。

第3節 調査の経過

平成17年6月8日より0.4m³の重機を使用し表土剥ぎを開始した。試掘の結果、対象地の中央部分が攪乱であることから北半分のみ剥ぎ、南側に作業員駐車場、テント、残土置き場とした。

午後より作業員を投入し、土嚢づくり等の環境整備を並行して行い、翌日より遺構の検出を開始した。取り壊した建物の地中梁を検出したため、これらの攪乱土除去から取り掛かった。作業終了後、遺構の掘り下げはビットから行い、並行して平板による1／50の遺構配置図を作成した。

遺構実測には遺跡汎用システム「カタタ3DC」を用いて作成し、一部、土壌等を1／10による個別実測を行った。併せて遺構の写真撮影の作業を行い、遺跡の全体写真は、7月15日に高所作業車を使用して北側調査区の調査を終了した。終了後、2箇所の井戸を立ち割り、3mまで掘り下げた。

埋め戻し作業終了後、引き続き、南側調査区の表土剥ぎを行い、7月21日に終了した。その後、遺構検出、実測、全景写真の撮影を8月5日まで行い、8月8日に埋め戻し、全てを撤収した。

報告にあたっては、調査と並行して、遺物の洗浄を行い、調査終了後、報告書掲載の遺物を選定した。担当者の浅学ゆえ、適切な遺物選定を行ったとはいえず、出土量パンケース25箱におよぶ量の遺物の極一部を掲載したのみで、甚だ、不完全な報告となってしまった。今後の自戒とするところである。

第2章 位置と環境

今回、調査を行なった「京隈侍屋敷」は、筑後川南岸700mの微高地に立地する。現在では道路を挟んだ北に明善高校、西に日吉神社が所在する。調査区の標高は13m前後である。日吉神社は調査区現地表から最大1.5mの比高差を有し、京隈侍屋敷3次調査での標高が11m前後となっていることから東に向かって徐々に低く傾斜する。

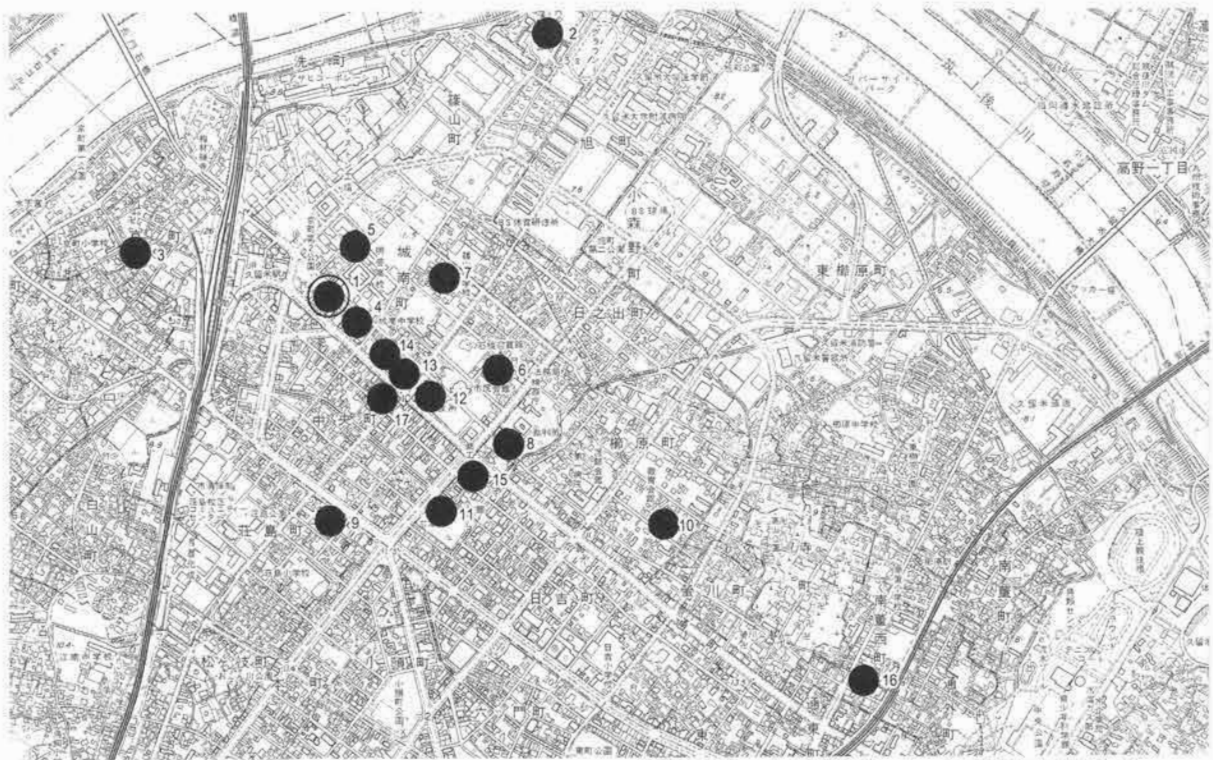
全体的な地形は近年の開発によって概要を知るには些か情報不足であるが、大凡、久留米城を中心として、東は東櫛原町、西は京町辺りまで自然堤防の微高地が広がっていたと推察される。

この微高地には弥生時代から古墳時代にかけての遺構が残っているが、近世、近代の開発によって残存状況が劣悪な場合が多い。このことから現在の地表面よりも幾分か高かったことが窺える。特に本調査区周辺は、明治44年11月11日からの陸軍特別大演習を挙行しているが、この際、大本営を明善高校に置いた。この建設計画に起因して、この一帯は、大規模な造成が行なわれたようである。

久留米城下町の発展の歴史は、元和7年(1621)、有馬豊氏が北筑後の領主として久留米城に入城以来、毛利、田中家の統治時代の町並みを改変し、城や城下町を本格的に整備したことに始まる。整備は、寛永期(1624~1644)にほぼ完成したと推定され、東や南に拡大しながら明治期に至る。

久留米市では平成元年の三本松町遺跡以来、城下町を発掘しており、久留米城、外郭遺跡、侍屋敷(京隈・庄島・十間屋敷・櫛原)、城下町に大別している。

京隈侍屋敷は城を中心として西側に広がる侍屋敷で、現在の久留米駅周辺を指す。安政二年図によると調査区は久徳宗右衛門宅の敷地で、西入りの東西24間半、南北9間半と記されている。同様に、対象地の南側は、本庄一郎宅となっている。



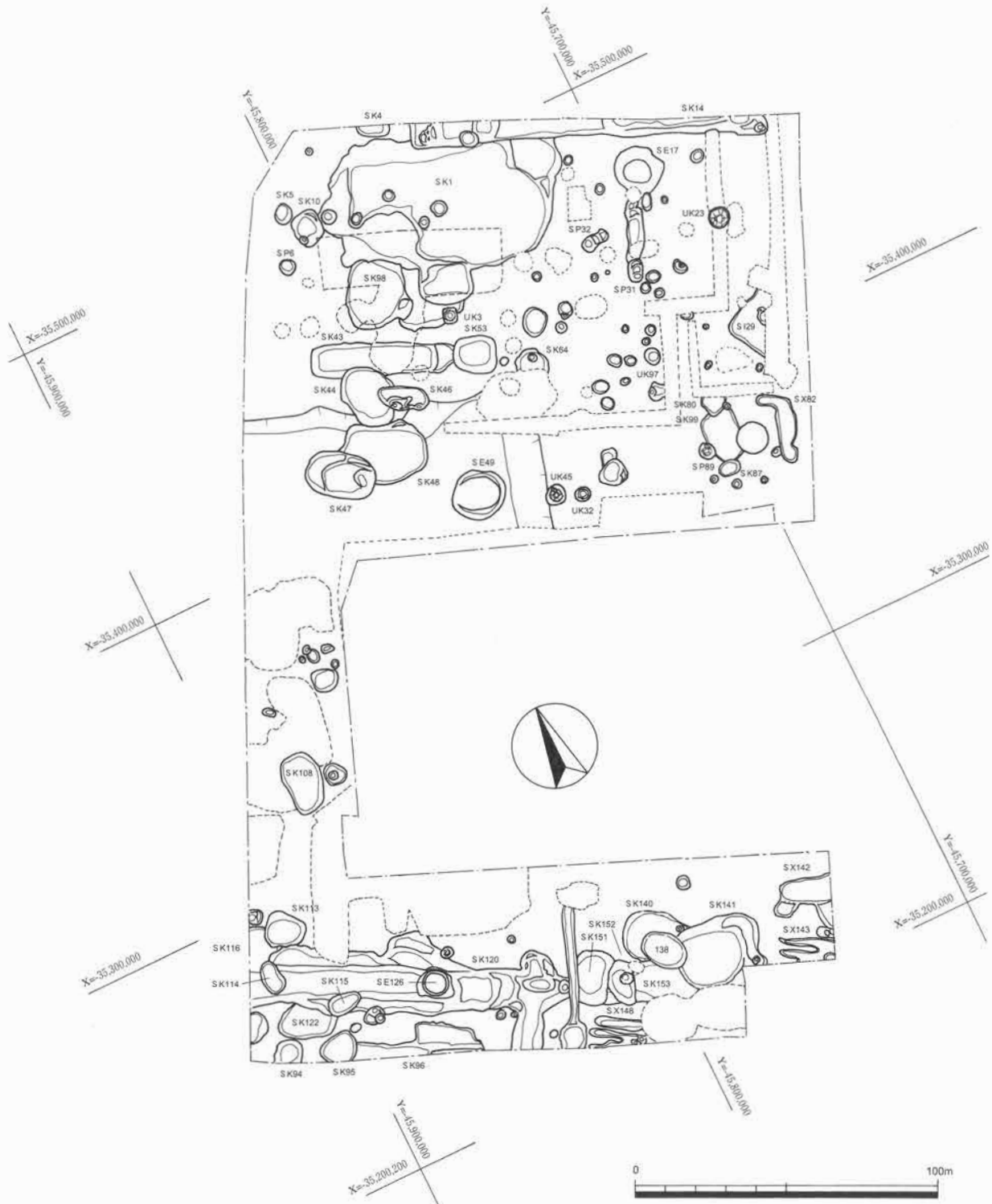
- | | | | |
|---------------------|------------------------|---------------------|-----------------------|
| 1. 京隈侍屋敷第5次 | 2. 久留米城址 | 3. 京隈侍屋敷第2次(京隈小路) | 4. 京隈侍屋敷第3次 |
| 5. 京隈侍屋敷第4次 | 6. 久留米外郭遺跡第2次 | 7. 久留米外郭遺跡第7次 | 8. 久留米外郭遺跡第10次 |
| 9. 庄島侍屋敷第4次 | 10. 櫛原侍屋敷第4次 | 11. 久留米城下町第1次(三本松町) | 12. 久留米城下町第2次 |
| 13. 久留米城下町第6次(呉服町) | 14. 久留米城下町第10・11次(魚屋町) | 15. 久留米城下町第14次(米屋町) | 16. 久留米城下町第15次(通町十丁目) |
| 17. 久留米城下町第16次(魚屋町) | | | |

第1図 遺跡周辺図(1/20,000)

第3章 調査の記録

第1節 基本層序

前述したように、本調査区の周辺は、明治44年の陸軍特別大演習の際、大本営を置いた現明善高校一帯を造成したため、削平を受けている。そのため、約30cmの表土を剥ぐと遺構面に達する。更には弥生～古代と考えられる埋土の遺構は深さが5cmに満たないものが大半で、城下町として開発されてきたことも考慮すべきであろう。近世の遺構は井戸、穴蔵を除き、ピットも20～30cmの残存状況であった。



第2節 弥生、古墳時代の遺構

弥生時代、古墳時代の遺構は、調査区の東側にその大半が検出された。残存状況は悪く、深さ5cmに満たないピットが主であった。大半が調査区外のため竪穴住居と断定するに至らないがS I 29（第3図）は方形の一角が検出されている。床面からはピットが検出される。その他、SK 1、SK 43等の土壙から弥生土器片、須恵器片、土師器片が出土している。土師器皿は底面に、ヘラ削りを施しており、8世紀後半～9世紀初頭の所産であろうか。

第3節 近世の遺構

近世の遺構は153を数え、その内容は井戸、埋甕遺構、土壙、廃棄土壙、ピットである。目を引くのは、廃棄土壙で調査区の西側、南東側に集中する。また、西側の中央部は約10cm～30cm段落ちしている。この部分は、廃棄土壙が最も集中している部分である。

埋甕

調査区内で5基出土している。全て北側調査区より検出されるが、集中して分布しているのではなく、点在している。

UK 3（図版2-3、第3図） 北側調査区西側、SK 1の南より検出。平面プランが方形の掘形に胴径0.44mの陶器製甕が埋設される。安定するように甕の周囲には土が詰められる。内面にはアンモニアが付着しており、便所として使用していたことが看取される。掘形は径0.6mを測り、深さ0.46mである。

UK 23（図版2-4・5、第3図） 北側調査区東より検出。地中梁に一部、破壊されている。掘形の平面プランは円形で、北側に段を有する。胴径0.65mの陶器製大甕が埋設される。安定するように甕の周囲には土が詰められる。UK 5とは異なり、アンモニアが付着していない。口縁は甕の内部から出土した。

UK 32（第3図） 北側調査区南よりUK 45と並列した状態で検出。大部分を削平されたのか、土師質土器製の甕は底部のみ0.1m程度が残存する。掘形の平面プランは円形を呈し、径0.48mを測る。深さは0.2mである。

UK 45（図版2-6、第3図） 北側調査区南より検出。UK 32の西にあり、土師質土器に釉薬をかける点及び検出状況が類似する。この2つは同時期の所産であろう。甕の中から大正14年製造の1銭硬貨が出土している。

UK 97（図版2-7、第3図） 北側調査区南東より検出。掘形の平面プランは円形を呈し、土師質土器製の甕が出土した。口縁は甕の内部から出土した。

井戸

調査区内で4基出土している。内、1基はコンクリート製の井戸側で真砂土を人為的に埋めており、遺構として数えていない。未掘。

SE 17（図版2-8・9） 北側調査区北東より検出。漆喰の井戸側が50cmほど残り、下部構造は縦幅15～20cm、横幅30～40cmの扁平な礫を積み重ね、隙間を漆喰で充填している。埋土は真砂土を用い、50cmまでは灰白色砂質土で、以下は湿気のためか、暗灰色砂質土であった。一括して埋めていると考える。直径は約80cmで、裏込めは40cm程度である。未完掘。埋め戻し作業中に重機を用いて断ち割りを行い、石詰みが約1.5m続き、その下は素掘りであることを確認した。深さは3mまで掘り下げたが、底までは至っていない。

SE 49（図版2-10、第3図） 北側調査区の中央部南より検出。井戸側は失われており、詳細は不明。径1.84mを測り、楕円形を呈す。上面から0.3mのところまで北側に段を有する。SE同様埋土には真砂土を用いる。

SE 126 南側調査区西より検出。井戸側は漆喰状ものを使用している。埋土は他の井戸同様、真砂土。

土壙

明確に穴蔵といえるものはSK1でその他のSK14、SK43、SK120は溝状を呈す。

SK1（図版3-11・12、第4図） 調査区の北西より検出。SK14に切られる。7.8×4.4mを測り、深さ1.1mで平面プランは長方形を呈す。底に近い部分、特に南東隅で炭化物の碎片を多量に含む。最も深い部分は砂質土で5cm程の堆積であったが、その直上でやや硬化し、この面が本来の床面と見る。層位の観察から人為的に埋められてたようである。南側の長辺が段掘りになっており、ここが入り口であろう。大量の陶磁器が出土している。その他、漆器の盃及びその碎片、筵の類いと思われる繊維質のものが纏って出土した。

SK14（図版3-13・14・15、第4図） 調査区の北より検出。SK1を切る。北側の長辺は調査区外のため未確認であるが、底部の立ち上がりまでは確認でき、さほど、幅が広くないようである。東西に長く、11.75×0.7mを測り、平面プランは細長い長方形を呈す。断面はU字を呈し、深さ0.8mである。西側の短辺には段掘りがあり、階段であると考ええる。SK1同様、人為的に埋められたようである。最深部は東側の掘り込みでそこから東端に至るまで一段高くなる。

SK43（図版3-17・18、第4図） 北側調査区中央部西より検出。廃棄土壙に切られる。4.72×0.68mを測り、深さ1.28mで平面プランは細長い長方形を呈す。堆積は層に分かれ、人為的に埋められたようである。前述の2遺構同様、多量の陶磁器が出土。特に徳利が多く、萬延元年（1860）と記されたものが出土している。

SK53（図版4-19、第3図） 調査区中央部より検出。SK43に切られる。1.44m×1.19mを測り、深さ0.41mである。平面プランは隅丸方形を呈す。壁面に真砂土を固めた漆喰状のものが残る。本来は底も含め、全面を覆っていたであろう。SK43より萬延元年の徳利が出土していることからこの土壙は明治になってからのものと考ええる。

SK120（図版4-23・24・25、第4図） 南側調査区南より検出。廃棄土壙に切られる。検出した部分で10.8×2.6mを測り、深さ1.35mで平面プランは細長い長方形を呈す。北側の長辺中央部で、段掘りを確認している。土壙への侵入口と考える。他の土壙同様、多量の陶磁器が出土している。この土壙も人為的に埋められたようである。

その他の土壙は調査区の西側及び南西に多く検出される。複雑に切りあっているので実数は定かではないが確認したものは15基ほどを数える。廃棄土壙としたものは、陶磁器、瓦片が纏って出土し、埋土中に炭化物が含まれるものとした。平面プランは、円形、楕円形、不定形と様々であるが、概ね、径1～1.5m、深さ0.4～0.6mの範囲に収まる。時期については不明である。

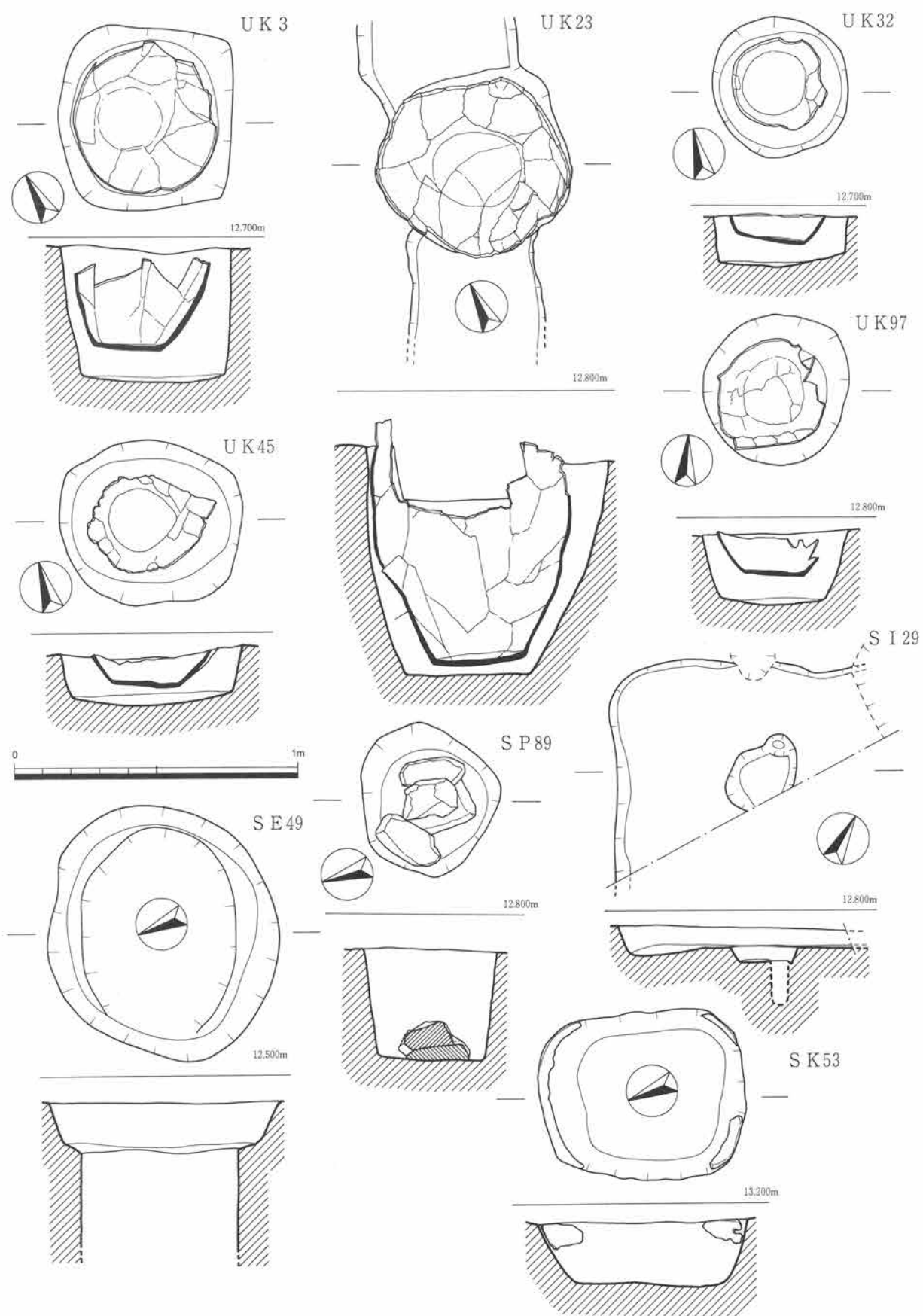
ピット

近世のピットは北側に多くみられ、建物に結びつく成果は得られなかった。平面プランは円形、楕円形を呈すものが殆どであるが、1例、底に扁平な礫を据え、その上に3つの礫がのった状態のもの（SP89、図版4-20）があり、礎盤であろうか。

出土遺物

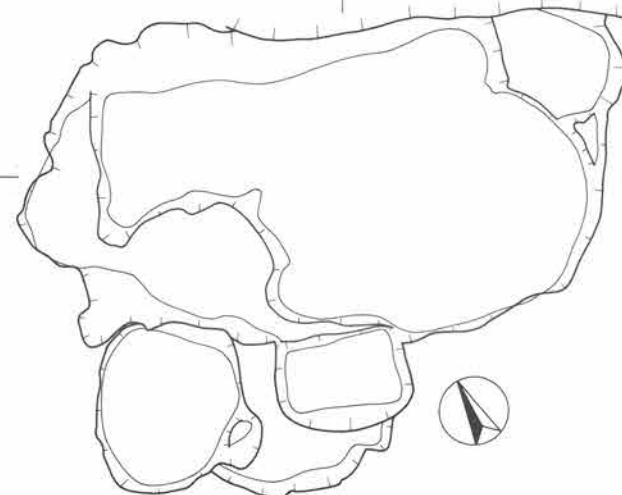
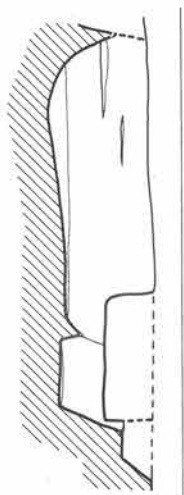
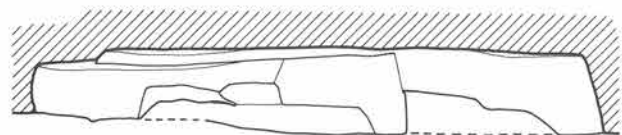
全体の大半を18c後半～19c前・中頃の磁器と陶器が占める。出土量が最も多い遺構はSK1であった。その内容は、碗、皿、仏具、紅皿、行平鍋、急須、瓶、播鉢等、生活雑器が占める。この中にSK1より明染の碗、SK14より絵唐津が出土しており、伝世品であろう。その他、朝妻焼、東野亭焼がみられる。

SK43からは「萬延元年」「筑嶋」「□□」と三方に縦書きされたものをはじめ、3点の徳利が出土している。萬延元年は1860年で、築島は調査地点から南へ200mの所にある地名で現在でも残っており、バス停の名称にもなっている。出土遺物の詳細については、別表の遺物観察表を参照されたい。

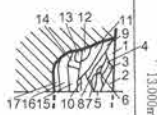


第3図 遺構実測図① (UK 3~97・SP 89 1/20、他は 1/40)

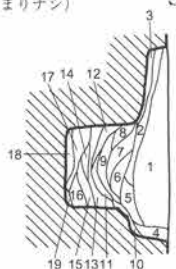
SK 1



1. 灰茶褐色土(黄色土混)
2. 暗灰茶褐色土
3. 茶灰色土(黄色土混)
4. 明茶灰色土(黄色土混)
5. 明黄茶灰色土(炭化物混)
6. 黒紺褐色土
7. 茶褐色土(黄色土混)
8. 暗茶灰色土
9. 暗灰黒色土(炭化物混)
10. 暗黄茶色土
11. 暗黄茶褐色土
12. 暗灰茶褐色土
13. 灰黒色土
14. 灰茶褐色土(黄色土混)
15. 黄茶褐色土
16. 明茶褐色土
17. 暗茶褐色土(黄色土混)
18. 黄橙褐色土
19. 暗茶灰色土(炭化物混)
20. 暗茶褐色粘質土



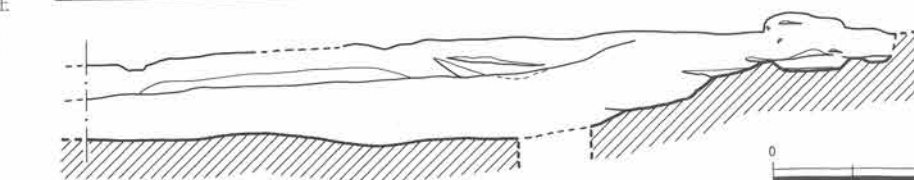
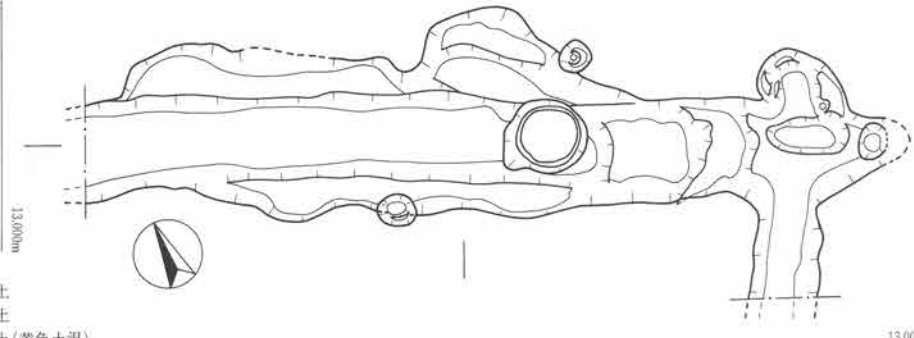
1. 暗紺褐色土
2. 茶黒褐色土
3. 薄茶黒色土(黄色土混)
4. 薄茶黒色土(小石多量)
5. 黒茶褐色土
6. 暗茶褐色土
7. 茶褐色土
8. 暗茶褐色土(小石多量)
9. 暗茶褐色粘質土
10. 薄黒茶褐色土(砂混)
11. 薄黒茶褐色土(しまりナシ)
12. 暗茶褐色土
13. 黒茶褐色土
14. 薄黒茶褐色土
15. 暗黒茶褐色土
16. 茶黒色砂質土
17. 黄橙褐色土



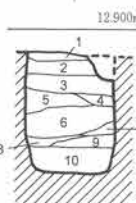
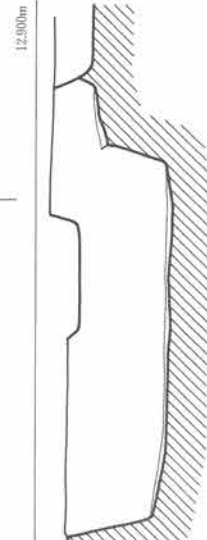
1. 薄茶灰色土
2. 暗茶灰色土
3. 暗黄茶灰色土
4. 茶灰色土
5. 暗茶褐色土(黄色土混)
6. 暗茶褐色土(黄色土混)
7. 暗黄茶褐色土
8. 黄茶褐色土
9. 暗茶褐色土(しまりアリ)
10. 茶黄褐色土
11. 茶黄灰色土
12. 黄灰色土
13. 灰茶褐色土(黄色土混)

14. 暗灰黒色土
15. 暗茶灰色土
16. 灰茶褐色土(黄色土混)
17. 灰茶褐色土
18. 黄褐色土
19. 灰黒色土

SK 120



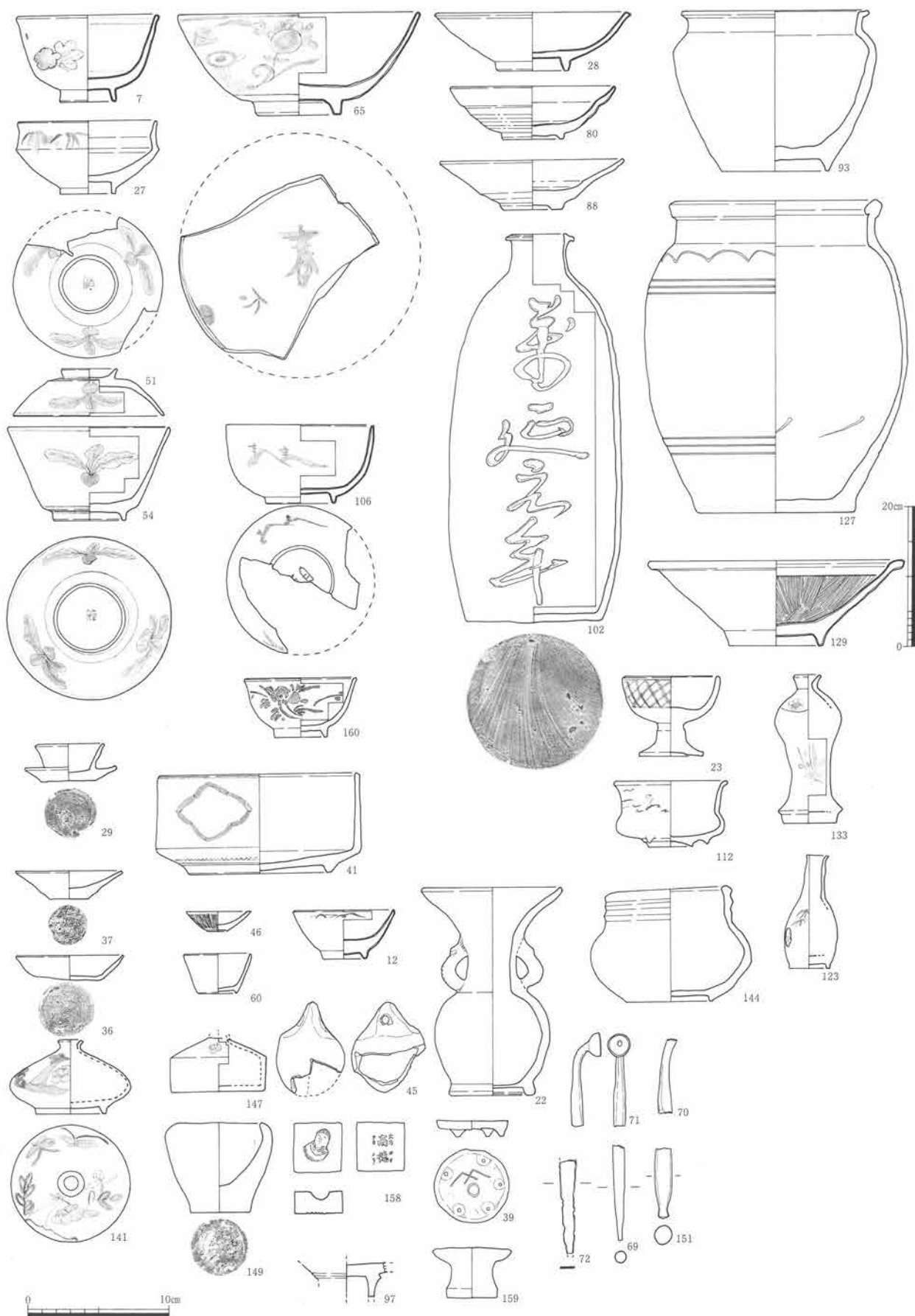
SK 43



1. 暗黄茶褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 茶灰色土(炭化物混)
4. 灰茶褐色砂質土
5. 暗茶灰色土
6. 灰茶褐色土
7. 黄茶灰色土
8. 薄紺茶褐色砂質土
9. 紺茶褐色砂質土

SK 14

第4図 遺構実測図② (SK 43 1/80、他は 1/100)



第5図 遺物実測図 (1/4、93・127・129 1/8)

第4章 まとめ

久徳家の祖は次郎右衛門三長でその子、長男次郎右衛門三重、五男新九郎宗重が久徳姓を継いで各々知行三百石、百二十石（始め二十石三人扶持、元禄元年に新地百二十石）を給せられて、幕末まで続く。今回の調査では三百石の久徳家の敷地が対象である。

久徳次郎右衛門三長は馬廻組に属し、島原の乱に従軍したことが残っている。その子孫には幕末の殉難十志士の一人、與十郎がいる。この久徳與十郎は五男新九郎宗重の久徳家である。調査区が南北約30m、東西18mで、延寶八年図（1680）では久徳家、可児家の敷地の一部が含まれ、天保年間図（1830～1844）では久徳家、本庄家となり、安政二年図では久徳家、本庄家という変遷を辿る。

地割りは北と西に道路が走り、一貫して現在の立地と変わりはない。延寶八年図によると敷地は西入りの東西24間半（44.1m）、南北9間半（17.1m）と記される。道路の位置と幅員については、調査区内で当てはまる遺構は確認できていないが、現行の状況を考えて北境はSK14の北側と考える。西境はSK120が調査区外に広がりを見せ、遺構としていないが対象地の北端に埋めていない井戸が現行道路との境にあり、当時は道路幅がまだ、狭かったと推測される。

SK14は細長く断面V字型を呈す遺構で西側短辺には階段状の掘形が残り穴蔵として機能していたことが窺える。また、SK1とは切り合い関係にあり、土層観察よりSK1が埋没した後にSK14が掘られている。そのため、屋敷の立て直し、あるいは改築が行われていると想定できるが、出土遺物を比較するとSK14は遺物量が少なく単純な比較は出来ないが両者とも19cから明治初頭の遺物が占め、大差ない内容である。この中から、SK14からは絵唐津と呼ばれる17c初頭の陶器が出土し、久徳家が明治初頭まで続いていることから久徳家に伝わる伝世品であったと考えられる。これと同様にSK1からは18c中頃の明染、が出土している。また、SK43はSK14同様、東西に細長い土壌で貯蔵庫として機能していたと考える。SK43及びその他の土壌についても概ね、18c後半～19c前・中頃に比定できよう。久徳家と本庄家の境は土壌及び攪乱で詳細については不明である。

その他、屋敷の位置、構造を示すものは厠UK3・UK23・UK32・UK45・UK97、SE17・SE49、SP89が該当すると考える。この中でUK32・UK45は、UK45から大正14年と記された一銭硬貨が出土し、両者の甕は類似したものであることから同時期と推測され、大正期以降の屋敷であったと考えられる。また、SK53も明治期の屋敷であろう。幕末から明治初頭まで久徳、本庄家があり、明治40年以降、造成され、両家の敷地が統合される形で現在の敷地となり、大正から昭和にかけてレンガ構造の半地下式の部屋とUK32・UK45の屋敷が建ったと推測される。



第6図 安政二年久留米城下図

第1表 遺物観察表①

遺物 番号	図版番号	種類	器種	出土遺構	法量 (cm)			染付・釉薬	装飾 文様	特徴	底面・内底	製作地	年 代	登録番号
					口径	底径	器高							
1	5-27	磁器	碗	S K 1	10.8	4.4	6.2	染付	花卉文	端反碗	花文	肥前		200508001
2	5-27	磁器	碗	S K 1	9.6	3.9	5.6	染付	楼閣	端反碗	鳥アリ	肥前		200508003
3	5-27	磁器	碗	S K 1	9.9	3.6	5.5	染付・薬灰釉	格子文	端反碗	イゲタ	肥前		200508006
4	5-28	磁器	碗蓋	S K 1	11.3	-	5.1	染付	亀甲文、鶴					200508008
5	5-27	磁器	碗	S K 1	9.8	3.0	4.5	染付	若松文					200508009
6	5-28	磁器	碗蓋	S K 1	9.9	-	4.3	染付	松、梅					200508010
7	5-27	磁器	碗	S K 1	10.0	4.2	6.3	染付	梅	端反碗	鳥アリ			200508011
8	5-27	磁器	小碗	S K 1	9.2	3.7	5.3	染付	鳳凰、口縁内雷文		見込・円形 松竹梅			200508014
9	5-29	磁器	盃	S K 1	7.3	3.2	3.5	染付	文様アリ					200508017
10	5-29	磁器	盃	S K 1	6.7	2.5	2.7	白磁	文様アリ					200508018
11	5-29	磁器	盃	S K 1	6.4	2.5	3.1	白磁・薬灰釉	文様アリ					200508020
12	5-29	磁器	盃	S K 1	7.1	3.0	3.5	染付・薬灰釉		高台の一部に軸が欠ける				200508021
13	5-29	磁器	盃	S K 1	6.0	3.0	5.1	染付	龍	口紅				200508022
14	5-30	磁器	片皿	S K 1	8.8	3.6	1.7	白磁	口縁～見込み、稜花					200508024
15	5-30	磁器	中皿	S K 1	12.3	7.5	3.3	染付	口縁、稜花、山水文	蛇の目高台				200508025
16	5-30	磁器	中皿	S K 1	13.1	7.8	3.8	染付	宝づくし	蛇の目高台				200508026
17	5-29	磁器	盃	S K 1	6.7	2.5	2.6	染付						200508028
18	5-29	磁器	盃	S K 1	5.5	2.3	2.1	白磁						200508029
19	5-29	磁器	盃	S K 1	5.5	2.5	2.7	染付						200508030
20	5-29	磁器	盃	S K 1	5.2	3.0	4.1	染付	稲穂					200508031
21	8-57	磁器	仏飯器	S K 1	6.0	3.6	5.3	染付	外面松					200508036
22	8-57	磁器	仏花器	S K 1	10.0	(2.0)	14.8	青磁釉						200508038
23	8-57	磁器	仏飯器	S K 1	6.8	4.6	5.6	染付	格子文					200508042
24	5-29	陶器	盃	S K 1	7.0	(0.9)	2.8	白磁						200508043
25	6-36	陶器	碗	S K 1	9.8	4.2	4.8	灰釉	下絵付					200508044
26	6-36	陶器	碗	S K 1	12.0	(1.7)	4.4	灰釉・貫入アリ	下絵付による笹					200508045
27	6-36	陶器	碗	S K 1	10.0	3.8	5.1	灰釉、下絵付	笹(緑、黒)					200508049
28	5-30	陶器	中皿	S K 1	14.0	5.4	4.1	灰釉、黄釉	打ハケ					200508054
29	6-38	陶器	灯明具	S K 1	5.0	-	2.6	鉄釉			回転糸切底			200508055
30	6-38	陶器	灯明具	S K 1	6.5	-	3.6							200508056
31	6-37	陶器	盃	S K 1	6.5	3.2	3.0	鉄釉						200508058
32	6-37	陶器	碗	S K 1	9.0	4.2	5.7	鉄釉						200508059
33	6-37	陶器	土鍋	S K 1	17.3	6.0	5.4	鉄釉		突起状、脚3本				200508060
34	6-38	陶器	灯明皿	S K 1	8.2	3.5	7.3	鉄釉			回転糸切底			200508061
35	6-38	土師質	灯明皿	S K 1	18.0	4.2	0.5				回転糸切底			200508067
36	6-38	土師質	灯明皿	S K 1	7.7	4.2	1.6				回転糸切底			200508068
37	6-38	陶器	灯明皿	S K 1	7.6	2.8	2.1	鉄釉			回転糸切底			200508069
38	9-63		ハマ	S K 1	-	3.9	1.4			脚3本				200508077
39	9-63		ハマ	S K 1	5.1	-	1.2			脚5本				200508078
40	9-63		ハマ	S K 1	5.5	3.8	3.8			脚なし、断面台形				200508079
41	5-31	磁器	段重	S K 1	14.5	9.7	7.0	染付	外面:窓絵	連続山形文				200508081
42	9-64	土師質	土鈴	S K 1	(5.3)	(5.0)	(4.8)							200508083
43	9-60	陶器	土瓶	S K 1	8.5	6.0	1.0	褐釉		突起状脚(鼎)、萐莆底			19c	200508084
44	9-64	土師質	土笛	S K 1	(5.3)	(4.8)	4.8			鳥を象る				200508085
45	9-64	土師質	土鈴	S K 1	(3.3)	(5.0)	(6.0)							200508087
46	5-32	磁器	紅皿	S K 1	4.6	1.4	0.6							200508105
47	5-31	磁器	皿	S K 1	13.8	7.6	4.6	染付	外面:唐草文、内面:花文		見込:花文、 底面:大明成化半		18c前	200508109
48	5-34	磁器	碗	S K 1	10.0	3.5	4.7	染付	文字状	「ト」朝		朝妻	18c前半	200508119
49	5-32	磁器	油壺	S K 1	4.5	-	6.4	色絵	上絵付、草文					200508120
50	5-34	磁器	蓋	S K 1	10.3	3.3	3.5	染付	燕	「ト」朝		朝妻	18c前半	200508122
51	5-34	磁器	蓋	S K 1	10.7	3.7	2.6	染付	燕	「・」朝		朝妻	18c前半	200508123
52	5-34	磁器	碗蓋	S K 1	10.3	4.1	5.4	染付	燕	「ト」朝		朝妻	18c前半	200508124

第2表 遺物観察表②

遺物 番号	図版番号	種類	器種	出土遺構	法量 (cm)			装飾 文様	特徴	底面・内底	製作地	年 代	登録番号
					口径	底径	器高						
53	5-34	磁器	碗	S K 1	-	5.2	6.3	染付	蕉	「ト」朝	朝妻	18c前半	200508125
54	5-34	磁器	碗	S K 1	11.9	4.9	6.5	染付	蕉	「ト」朝	朝妻	18c前半	200508126
55	5-32	陶器	水滴	S K 1	6.8	4.0	3.9	灰釉	花文	「本山」高台に軸なし			200508127
56	5-31	磁器	皿	S K 1	14.8	8.8	5.0	染付		口紅、蛇ノ目高台	梅		200508130
57	5-32	磁器	盃	S K 1	-	3.6	3.6	色絵	上絵付	美人画			200508131
58	5-30	磁器	皿	S K 1	12.9	4.2	4.0	染付	内面:格子文				200508135
59	5-32	磁器	盃	S K 1	4.8	2.8	3.3	白磁					200508136
60	5-32	磁器	盃	S K 1	4.4	2.9	2.0	白磁					200508137
61	9-61	陶器	鉢	S K 1	19.7	8.0	7.9	灰釉	ハケ目				200508141
62	5-30	陶器	中皿	S K 1	12.3	5.2	3.9	灰釉					200508146
63	8-57	陶器	仏花瓶	S K 1	-	5.5	8.5	褐釉			回転糸切り底		200508147
64	5-32	陶器	花瓶	S K 1	-	7.8	18.9	褐釉					200508148
65	5-33	磁器	碗	S K 1	-	6.2	7.3	色絵	花文(赤、緑、黒)	明染	広東	16c末	200508150
66	6-35	陶器	植木鉢	S K 1	22.0	9.0	14.7	灰釉、鉄絵					200508153
67	10-67	須恵器	大甕	S K 1	-	-	-		タタキ目				200508154
68	10-67	須恵器	大甕	S K 1	(5.0)	4.9	0.6		タタキ目				200508155
69	10-68	銅製品	煙管	S K 1	径0.9	長6.8	-			吸い口			200508163
70	10-68	銅製品	煙管	S K 1	長5.1	径0.9	-		雁首、火皿欠損	煙管の羅字(竹製)が残る			200508164
71	10-68	銅製品	煙管	S K 1	長6.3	径0.8	-			雁首、中に灰が残る			200508165
72	10-68	銅製品	スプーンの柄	S K 1	長6.5	径1.1	-						200508166
73	10-68	銅製品	銅銭	S K 1	径2.5	厚0.1	-			寛永通寶 新寛永			200508168
74	10-68	銅製品	銅銭	S K 1	径2.5	厚0.1	-			寛永通寶 新寛永			200508169
75	10-68	銅製品	銅銭	S K 1	径2.3	厚0.1	-			寛永通寶 新寛永			200508173
76	10-68	銅製品	銅銭	S K 1	径2.2	厚0.1	-			不明			200508176
77	9-62	土師質	塩壺蓋	S K 1	6.8	7.9	2.2						200508179
78	8-58	陶器	瓶	S K 1	-	10.9	23.5	灰釉、流し掛け					200508180
79		陶器	甕	U K 3	-	14.1	33.8	鉄釉		アンモニアが付着			200508182
80	6-39	陶器	中皿	S K 5	12.0	4.2	3.7	灰釉			回転糸切り底		200508188
81	6-39	土師質	灯明皿	S K 5	7.4	4.0	1.4				回転糸切り底		200508189
82	6-39	土師質	灯明皿	S K 5	7.4	3.5	2.0						200508190
83	6-41	土師質	火入	S P 6	-	-	(4.3)	外:化粧土		墨書	内:刷毛目		200508192
84	8-58	陶器	瓶	S P 6	3.3	6.6	22.7	黒釉、灰釉、流し掛け					200508193
85	6-39	陶器	碗	S K 10	-	4.7	6.2	褐釉					200508196
86	6-39	陶器	蓋(土瓶)	S K 10	外径8.7	5.0	3.0	鉄釉			回転糸切り底		200508197
87	6-39	陶器	灯明皿	S K 10	8.2	3.8	2.8	鉄釉			回転糸切り底		200508198
88	6-40	陶器	皿	S K 14	-	4.5	3.6	鉄釉		絵唐津	唐津	16c末	200508201
89	6-40	陶器	皿	S K 14	-	4.3	4.5	灰釉		胎土目	唐津	16c末	200508202
90	10-67	弥生	甕	S K 14	-	-	(10.8)			紐2段			200508212
91	10-70	陶器	甕	U K 23	(50.0)	32.1	90.2	鉄釉					200508213
92	9-65	土師質	甕	U K 32	-	(12.8)	22.0			アンモニアが付着			200508215
93	7-43	陶器	壺	S K 43	-	7.5	11.4	鉄釉					200508224
94	7-43	陶器	行平鍋	S K 43	16.8	6.8	7.3			碁笥底			200508226
95	7-44	陶器	甕	S K 43	25.2	11.5	21.5	灰釉	松絵				200508229
96	7-45	陶器	鉢	S K 43	38.0	18.8	18.3	灰釉			刻印アリ		200508230
97	10-67	弥生	高杯	S K 43	-	-	(2.9)			丹塗り			200508231
98	10-67	須恵器	大甕	S K 43	-	-	1.1		タタキ目				200508232
99	9-62		硯	S K 43	残8.5	7.2	2.7						200508233
100	9-59	陶器	瓶	S K 43	-	9.8	(27.5)	鉄釉		「正」「□□ヤ」	回転糸切り底	19c中	200508246
101	9-59	陶器	瓶	S K 43	(3.5)	8.8	(27.7)	鉄釉		「□屋」	回転糸切り底	19c中	200508247
102	9-59	陶器	瓶	S K 43	4.8	9.7	17.2	鉄釉		「萬延元年」「筑嶋」 「□□」	糸切り底	19c中	200508248
103	7-46	磁器	鉢	S K 44	13.5	8.5	10.2	染付	宝づくし	碁笥底	瀬戸美濃		200508249
104	7-47	土師質	七厘	S K 47	15.7	-	(10.4)			口縁部に針金留の跡			200508250

第3表 遺物観察表③

遺物 番号	図版番号	種類	器種	出土遺構	法量 (cm)			装飾			底面・内底	製作地	年 代	登録番号
					口径	底径	器高	染付・釉薬	文様	特徴				
105		土師質	甕	UK45	-	24.4	15.0			大正14年一銭出土				200508251
106	7-48	磁器	碗	SK47	9.8	3.8	5.2	染付	桜、草文					200508256
107	7-48	磁器	碗	SK47	10.0	(2.4)	5.5	染付	山水文	「ト」朝		朝妻	18c	200508257
108	7-48	磁器	碗	SK47	10.0	4.4	4.8	染付	山水文					200508264
109	7-49	磁器	中皿	SK47	20.2	12.0	3.0	染付	外:唐草文、内:松竹梅					200508269
110	9-60	陶器	土瓶	SK47	-	7.7	12.5	鉄釉	櫛目文	碁笥底				200508270
111	8-57	磁器	仏飯器	SK48	6.7	4.0	5.8	染付	外面:半菊					200508277
112	8-57	磁器	線香立て	SK48	7.6	3.1	4.6	染付	雲文?	突起状脚(冊)が形式化し、高台が付く			19c前半	200508279
113	8-58	磁器	瓶	SK48	-	9.5	(18.0)	染付	竹、花文、葡萄					200508282
114	10-67	須恵器	匙口椀	SK48	-	-	(5.0)		横ナデ					200508283
115		陶器	鉢	SK48	-	10.6	13.0	鉄釉						200508281
116		陶器	甕	SK56	-	23.7	-	鉄釉						200508296
117	9-60	陶器	土瓶	SK56	8.8	-	(11.8)	銅緑釉					19c	200508298
118	9-66	土師質	甕	UK97	-	14.4	14.3							200508299
119	9-61	陶器	鉢	SK120上	19.0	6.1	7.8	灰釉	ハケ目					200508319
120	7-50	陶器	小型播鉢	SK120上	15.8	6.7	5.0	鉄釉					19c	200508331b
121		陶器	灯明皿	SK120上	7.1	3.4	2.0	鉄釉			回転系切り底			200508333
122	7-50	土師質	人形	SK120上	(6.3)	(7.6)	(2.8)			馬型				200508335
123	7-50	磁器	徳利	SK120上	1.7	2.8	8.0		花文、笹					200508341
124		磁器	小碗	SK120上	(8.6)	3.3	3.9	色絵	宝文					200508345
125		磁器	紅皿	SK120上	4.6	1.3	1.5		外:稜花					200508360
126		磁器	紅皿	SK120上	5.2	2.2	2.0	白磁、色絵	羽子板、羽根	赤絵				200508361
127	10-71	陶器	甕	SK120下	30.4	22.2	44.6	鉄釉	沈線、円弧文内:連続した沈線					200508367
128	7-50	磁器	ポット	SK120下	5.6	5.3	10.4	染付	梅、小鳥		「中星□」		19c後半	200508371
129	8-52	陶器	播鉢	SK120下	36.0	12.0	12.8	鉄釉						200508372
130		陶器	蓋	SK120下	径5.9	-	(0.9)							200508373a
131		土師質	土瓶	SK120下	6.5	6.2	-							200508373b
132		磁器	碗	SK120下	11.2	6.0	5.9	染付	風景		鳥アリ			200508374
133		磁器	瓶	SK120下	1.3	3.2	10.7	色絵	花文、松、笹					200508376
134		磁器	散蓮花	SK120下	-	2.5	(2.3)	染付	文様アリ					200508383
135	8-53	陶器	碗	SK138	-	4.2	6.6	薬灰釉						200508397
136	8-54	磁器	急須	SK138	10.2	4.1	6.7	染付	花文		花文			200508398
137	8-53	陶器	皿	SK138	9.0	2.9	2.0	灰釉		碁笥底				200508400
138	8-53	陶器	皿	SK138	-	4.3	2.2	褐釉	櫛目	亀を象る				200508401
139	8-53		ハマ	SK138	径5.6	-	(1.2)			脚3本				200508402
140	8-53	磁器	散蓮花	SK138	縦4.1	横2.4	(2.6)	染付	花文					200508403
141	8-53	磁器	碗	SK138	10.5	4.4	5.6	染付	花文					200508399
142	8-55	磁器	髪油壺	SK141	1.0	4.2	5.3	染付	紫、花草文					200408407
143	8-54	陶器	油指	SK141	4.0	3.1	8.6	鉄釉						200508414
144	8-54	陶器	鉢	SK141	7.3	5.3	7.9	薬灰釉						200508415
145	10-69	土師質	瓦?	SK141	51.3	29.5	0.8			表面刷毛目調整				200508418
146	10-67	土師質	皿	SK141	-	-	(0.7)				施削り底			200508419
147	8-55	磁器	髪油壺?	SK151	-	6.7	(3.9)	染付	桜					200508429
148	8-55	磁器	小瓶	SK151	1.4	3.6	5.7	色絵						200508430
149	8-54	土師質	鉢?	SK151	6.8	4.1	6.5				回転系切り底			200508433
150	10-68	銅製品	銅銭	SK151	2.3	-	0.01			□宋通寶				200508436
151	10-68	銅製品	煙管	SK151	4.8	0.9	-			吸い口				200508437
152	10-68	ガラス	ガラス棒	SK151	5.1	0.4	-							200508438
153	8-55	磁器	四方皿	SK152	7.5	3.8	2.5	染付	宝文					200508441
154	8-55	磁器	段重	SK152	9.0	8.2	4.3	染付	花、草文、馬					200508445
155	8-55	磁器	段重	SK152	12.4	8.0	5.2	赤絵、色絵	梅					200508447
156	8-55	陶器	火あぶり	SK153	(13.4)	19.5	14.7	灰釉		把手が天井部に付く				200508452
157	5-34	磁器	碗	攪乱	11.5	5.1	5.7	染付	蕉	「・」朝		朝妻	17c前半	200508454
158	9-64	土師質	型枠	攪乱	3.3	3.3	1.8			人物の型枠	高德と刻印			200508457
159	9-63	陶器	トチン	攪乱	5.3	3.6	3.4				回転系切り底			200508459
160	8-51	磁器	碗	攪乱	8.0	3.4	4.1	上絵付	花文			徳化窯	18c後半	200508191

圖 版



1 北側調査区全景（南より）



2 南側調査区全景（北東より）



3 UK 3 検出状況 (東より)



4 UK 23 検出状況 (南より)



5 UK 23 完掘状況



6 UK 45 検出状況 (南より)



7 UK 97 検出状況 (南より)



8 SE 17 検出状況 (南西より)



9 SE 17 断ち割り状況 (南より)



10 SE 49 断ち割り状況 (東より)



11 SK1検出状況（南より）



12 SK1土層断面



13 SK14検出状況（東より）



14 SK14西壁検出状況



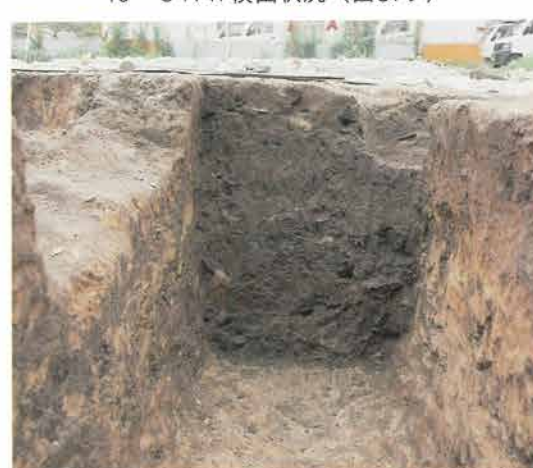
15 SK14土層断面



16 SK47検出状況（西より）



17 SK43検出状況（西より）



18 SK43土層断面



19 SK53検出状況



20 SP89検出状況（南より）



21 SK98検出状況（南西より）



22 SK98西壁工具痕検出状況



23 SK120検出状況（北東より）



24 SK120検出状況（西より）



25 SK120土層断面



26 SK140検出状況（南より）



27 SK 1 出土磁器碗



28 SK 1 出土蓋



29 SK 1 出土盃



30 SK 1 出土皿



31 SK 1 出土段重・鉢



32 SK 1 出土遺物



33 SK 1 出土輸入磁器



34 朝妻焼



35 SK 1 出土植木鉢



36 SK 出土陶器碗



37 SK 1 出土陶器



38 SK 1 出土灯明皿



39 SK 5・14 出土遺物



40 SK 14 出土皿



41 SP 6 出土鉢



42 SP 6 出土鉢底面（墨書）



43 S K 43出土遺物



44 S K 43出土植木鉢



45 S K 43出土鉢



46 S K 44出土鉢



47 S K 47出土火鉢



48 S K 47出土碗



49 S K 47出土中皿



50 S K 120出土遺物



51 輸入磁器（清朝）



52 S K 120出土擂鉢



53 S K 138・141出土遺物



54 S K 138・141・151出土遺物



55 S K 141・151・153出土遺物



56 S K 153出土火鉢



57 仏具



58 瓶



59 徳利



60 急須



61 鉢



62 その他の遺物



63 ハマ・トチン



64 土製品



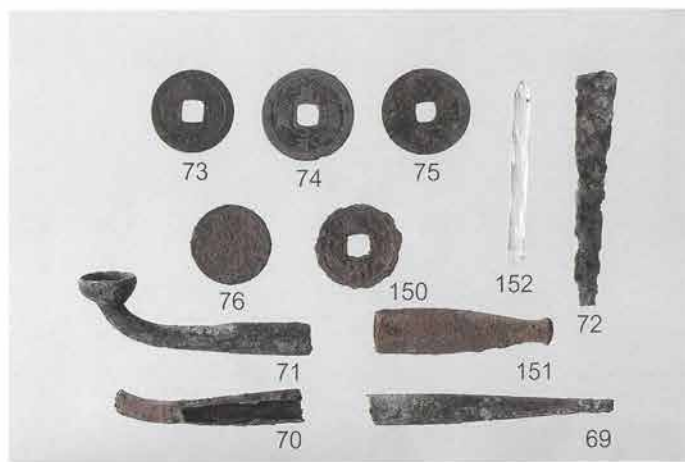
65 UK32出土甕



66 UK97出土甕



67 弥生・須恵器・土師器



68 銅銭・煙管



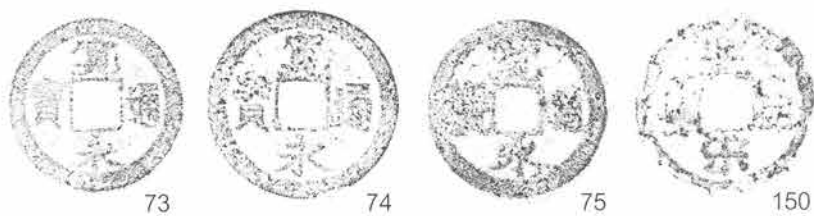
69 S K 141出土板状土製品



70 U K 23出土甕



71 S K 120出土甕



第7図 出土銭貨拓影(1/1)

報告書抄録

ふりがな		きょうぐまさむらいやしきいせきだいごじはくつちようさ						
書名		京隈侍屋敷遺跡第5次発掘調査						
シリーズ名		久留米市文化財調査報告書第220集						
編著者名		江島伸彦						
編集機関		久留米市 文化観光部 文化財保護課						
所在地		〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel：0942-30-9225 Fax：0942-30-9718 E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積	調査の原因
きょうぐまさむらいやしきいせき 京隈侍屋敷遺跡	ふくおかけんく るめし 福岡県久留米市 城南8-1、 8-52	40203		33° 19' 2"	130° 30' 24"	20050608 } 20050808	800㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
京隈侍屋敷遺跡	集落 城下町侍屋敷	弥生 古墳 江戸	ピット 竪穴住居 ピット 埋甕 井戸 土壌 ピット		弥生土器片 須恵器 陶磁器 土師質土器 瓦質土器		明染、 清朝磁器、 朝妻焼、 絵唐津等が 出土	
要 約								
久留米城下京隈侍屋敷内、久徳家、本庄家屋敷跡の調査。穴蔵を確認した他、3ヶ所、溝状に掘り下げた土壌を検出。18c後半から19cにかけての陶磁器が大量に出土している。磁器の大半が瀬戸美濃系のものであるが、地元窯の朝妻焼碗や、輸入磁器の明染、清朝磁器が若干量含まれる。その他、絵唐津焼の皿が出土。								
土木工事の届出日	17文財第126号平成17年5月6日			遺物の発見届出日		17文財第497号平成17年8月10日		

京 隈 侍 屋 敷 遺 跡

—共同住宅建設に伴う京隈侍屋敷遺跡第5次発掘調査—

平成18年1月31日

発 行 久留米市教育委員会

編 集 文化観光部 文化財保護課

印 刷 香和印刷株式会社